力強く暴力的な
愚か者によるフォリア

日居月諸

答案にはちゃんと dance と書いたつもりだったのに、a の上の部分がつながってくれなくて、dunce と読まれてしまったらしい。もともと大した結果じゃないから一点や二点失ったところで気にも留めないが、他でもない俺に対して dance の採点を厳しくするというのは当てつけだろうか。これくらいで減点するのはおかしい、とカジに詰め寄ったところ、dunce の意味を調べてこい、と言われた。

「**dunce**　音節 dunce　発音記号 [dˈʌns]

【名詞】【可算名詞】　のろま、覚えの悪い生徒、劣等生」

兄貴によればこれもダンスと読むのだそうだ。もっとも、dance はダェンスとでも書くべき発音だから厳密には違う。

「お前はダンス、ダンス、って発音してるよな。正しい発音さえ出来ない、まさに dunce ってやつだよ」

英語の答案は破り捨てて川に溶かしてやった。これで a を u と書いてしまった事実は、きっとプランクトンが分解してくれる。もしくは太平洋を渡る大魚の腹の中におさまって、カリフォルニアのスシ屋のネタとして並べばいい。有名なダンサーの腹の中におさまってしまえばいい。そして a を u と発音させるように仕向けるんだ。ヤツがそういうのならば、これからは dance を dunce と発音することにしよう、そんなムーヴメントがやってくれば、俺は予言者となれる。

いや、そんなまどろっこしい回り道なんて歩かなくても、俺が dunce を正式な発音にすればいいだけだよな、と河川敷を離れてゲーセンへと向かうと、ニッタがすでに筐体の前で踊っていた。

「よぉ、ドゥンス」

目の端で俺を捉えながら軽やかな足取りを見せるコイツの目の前ではハイスコアが計測され、今も加算を続けている。英語の答案はクラス中に広まって、俺のあだ名はドゥンスとなりつつあった。どんな経緯があったのかはしらないが、確かにダンスと呼ぶよりもドゥンスと呼んだ方がわかりやすいし呼びやすい。それなら何一つ構いやしない。

「明日の試合も見ねえの？　本田も長友も来てるんだぜ？」

ミスがカウントされない画面を横目に見つつ、ニッタはサッカー観戦に誘ってくる。この間は、確かチャンピオンズリーグとかいう試合を見ようと言ってきたのだったか。

「どうせワールドカップには行けるんだろ。なら来年から見るよ」

もったいねえ、と画面から目を離さずに言うのに対し、それはお前だって同じだろう、と言いかけてやめた。俺がサッカーを見ないこと

でメリットを得ているのと同様、こいつにとってもサッカー部をすっぽかしてゲーセンに入り浸っていることが後々役に立ってくるのだろう。それどころかいつだってサッカーをやっているつもりでいる可能性だってある。この軽やかなステップがドリブルの役に立つかもしれないし、ゲーセンの雑音が歓声に聞こえているのかもしれない。

「ていうか、来年は絶対見てくれるのか。ならいいや」

最終スコアをまるで気にも留めず、こちらを振り返ってくるニッタの姿は、交代でフィールドに入ってくる俺を待ち構えているように見える。

「さぁな。今は見るつもりだけど、来年になったらその時はその時だ」

なんだよそれ、と言ってニッタはパッドから降りて順番を譲った。明日の日本代表の試合さえ見る気がないのだから、来年になったら忘れているのが普通だ。第一、一年すればこいつはまた誘ってくる。こいつが誘ってくれるんだから、いちいち俺が心に留めている必要なんてない。

一年しても結局観戦する気にならないかもしれない。ひょっとしたら、ニッタがサッカー部に戻っていて応援を頼んでくるかもしれない。そしてまた断る。次は四年後のワールドカップ、その次は八年後、ピッチにこいつはいるんだろうか、もしかしたら今書いているサッカー選手にまつわる小論文のおかげでライターになれていたりして……どの道こいつはいつまでも、どこにいようと、スパイクをはいていなかろうと、ボールを蹴っていなかろうと、サッカーをしているのだろう。サッカーの楽しさがわかっているから、こうして誘ってくるのだろう。俺がいつもダンスをしているのと同じなのだ。いつもダンスをしているのが楽しいから、こいつがダンスを教えてくれと言ってくるのを受け入れたのと同じなのだ。もっとも、だからといって俺がサッカーを見るとは限らない。

＊

二〇〇二年の日韓ワールドカップは日本サッカーにとってメルクマールとなる出来事だった。九三年のJリーグ創設にともなって、サッカーにはバブル的な人気が寄せられたが、同時期の経済状況の後を追うように、熱狂は長く続かなかった。観客動員数の平均を見ればわかるように[1]、九四年の二万人弱をピークに客足は遠のく一方で、日本が初めてワールドカップに出場した九十八年でさえ多少の上がり幅を示した程度、その上がり幅も継続的な成果の土壌にはなれなかった。

様々な原因が挙げられるが、つまるところ世間はレベルの高いものを見せてくれなければ飽きてしまうのだ。当時の日本代表はワールドカップに出場したところで予選敗退が関の山、サッカーが盛んなヨーロッパとは決定的な差がある。しかし、トップクラスのプレイを見る

---

[1] http://www.j-league.or.jp/data/view.php?d=j1data&g=j1_0&t=t_visitor&y=2012

には時差の問題をクリアしなければいけない。いかにレベルが高かろうと、日本時間の深夜に開催されるヨーロッパの試合を見ようと思う不眠症の患者は多くなかった。

そんなレベルの高いサッカーが、〇二年になってようやく日本に上陸したのである。チケットの争奪戦を制せずとも、テレビを点ければサッカーにまつわる話題一色、あわよくば練習場に足を運んで選手を肉眼で見ることだって出来る。何よりこれらは普段の生活に溶け込んでおり、会社帰りであろうが休日であろうが（場合によっては職場であろうが）、気が向けば手軽に楽しめるものだった。いわば一か月のお試し期間が与えられたようなものだ。そんな事情を知ってか知らずか、トッププレイヤー達は世間の目を惹くプレイを披露してくれたし、日本代表も予選突破を果たして成長株として売り込むことに成功した。以降、Ｊリーグの観客動員は爆発的な増加を遂げる。

もっとも、日本人だけが旨味を吸い上げたわけではない。大した成績を残せなかったにもかかわらず、憧れの眼差しを向けられ続けた選手が存在する。デイヴィッド・ベッカム。あれから十年近く経ったとはいえ、その名前を忘れている日本人は少ないはずだ。十年前に比べ記憶力が衰えている老人だって、ゆるやかなトサカを立てている金髪を見かければ、あんたサッカーやっとったね、と言ってくれるだろう。第一この男は、ファッションブランドのイメージキャラクターも務めているのである。子供だってサッカー選手とはわからずとも、ハリウッドスターか何かとして認識しているかもしれない。

ともかく、ベッカムは規格外の人間だった。フットボーラーとしてではなく、広告塔として。彼の代わりになる選手はいくらでもいるだろうが[2]、彼以上に話題を振りまける選手は今後一切現れないだろう。なにより、フットボーラーが広告塔になれるのだということを証明した選手として語られ続けていくだろう。何も初めてＣＭに出演したフットボーラーというわけではない。言っておきたいのは、それ以前のプレイヤーに比べて桁違いの知名度を誇ったという事、そしてサッカーのビジネス化に拍車をかけたという事だ。

たとえば、彼がかつて所属したマンチェスター・ユナイテッドは、強豪であると同時に現在一番稼いでいるクラブとされているが、それはベッカムがいた頃から変わりない。それどころか、土台を作り上げたのはベッカムなのかもしれない。要するに、カッコいい選手をフィールドに出し続けたことでスポンサー収入は増え、補強費にあてることによってチームはより強くなっていった、というわけだ。

そうしたビジネスモデルにあやかって、多くの富豪はサッカークラブを買収し、商業のための広告塔に据えた。資本家だけではない、選手も収入が増えるのならばＣＭに出るしセミヌードだって買って出るようになった。そんな、フットボーラーがフィールドの外にあっても鍛錬を積まなければならなくなった時代における、最高の成功者が

---

[2] 彼の跡を受けついだクリスティアーノ・ロナウドは、（ベッカムが成し得なかった）世界最優秀選手として表彰される栄誉に与っている。

ベッカムにほかならないのだ[3]。

無論ベッカムだって、自身が商売の対象として見られていることを十分に自覚していた。フィールドの外ではいわずもがな、ボールを蹴る時も左手を大きく振り上げ、まるでマントを翻す貴族であるかのようなポーズを取る。これから蹴りあげられるのは、民へと分け与えられる黄金であるのだと誇示するように。ゴールを決めれば喜びを爆発させるが、自らを売り出すことも忘れない。ユニフォームを両手でつかんで自らの代名詞である「7」の番号がしっかりと見えるようにし、デイヴィッド・ベッカムが決めたんだ、という周知の事実を濃厚に印象付けるために、重ね重ねアピールし続ける。彼の一挙一動はそういう具合に計算されているのである。

〇二年のワールドカップにおいて、他の選手はともかく、ベッカムは間違いなく自分の名前を売り出すためにプレイしていた。あるいは、いつも自分をコーディネートしながらプレイしている様子を目の当たりにしやすかったのが、日本人だったというだけのことかもしれない。ともあれ、大会を通じて一ゴールしか決めておらず、チームも優勝出来なかったのに、なぜあんな熱狂が生まれたのか、という問いには、そういう背景があったのだとの答えを与えるだけで十分だろう。

そんなベッカムが、今シーズンをもって引退した。自らの価値を証明出来る格好の手段であるフットボールに別れを告げ、これから彼はどこに向かうというのだろう。ハリウッドスターにでもなるのか、それとも実業家としての一歩を踏み出すのか、はたまた監督になってフットボールへの情熱を絶やさないつもりか――しかしその場合、彼は守られる存在ではなくなる。これまではスポンサーもいたし、監督もいた。その下で好き勝手に振舞っているだけでよかった人間がフットボーラーを辞めた以上、これからは自分で責任をもって出資しなくてはならなくなるし、時には選手を守る必要だって出てくる。それがベッカムに出来るのだろうか？　妻に髪型やファッションを決めてもらっている人間に――ロサンゼルスに移籍した時も妻の意向を受け入れたような選手に――一人で歩いていくための道は伸びているのだろうか？

＊

プリントの説明通りにエクセルのファイルを作りこんでいたはずが、気付くとマス目は全て真っ白になってしまった。ヨシノに事情を説明したところ、今日の授業はやり直せる所まで、残りは時間を作って完成させて次回の授業までに提出しろと言われたので、遠慮なくグーグルを立ち上げた。と言っても、学校のパソコンで検索出来る範囲

---

[3] 事実、チームから得られるサラリーは他の選手に負けるものの、スポンサー収益を含めれば最も年収を得ているフットボーラーなのである。（参照：http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84%E9%81%B8%E6%89%8B%E9%95%B7%E8%80%85%E7%95%AA%E4%BB%98）

なんてたかが知れている。エロ動画も見られないインターネットなんて、何の役にも立たないじゃないか。

ふと、「ドゥンス」という単語で検索してみてはどうかと思いつき、入力してみたところ聞き覚えのない外国人の名前が先頭に来た。わかってはいたが、俺のページは一つとしてない。仕方なく「ヨハネス・ドゥンス・スコトゥス—Wikipedia」を開いてみるものの記述も簡素だし、業績も今一つわからない。しかし、「備考」の項目にはこう書いてある。

「英語で『のろま、劣等生』を意味するdunceという普通名詞は、スコトゥス学派に対して反対派が蔑称としてDunsesと呼びかけたことに由来すると言われている」

自分の先祖を知った気分だ。もしかしてこいつも有名なダンサーだったのではないか、と思ってしっかりと調べようとしたのだが、ヨシノもこの謎の人物に興味があるのか、後ろから画面を覗きこんでいた。哲学をやってるんですよ、れっきとした学問でしょ、と見かけたばかりの言葉を頼りに弁解をしたのだが、どうやら学校では学問をやっていけないらしい。

スマホの接続速度は遅い上に、スコトゥスにまつわるサイトはＰＣ用のページしかないから見づらいばかりで腹立たしく、結局図書室の分厚い人名事典をめくっていたところ、

「ゴトー君、もう授業はじまってるよ」

とレイカが声をかけてきた。まだドゥンスと呼ばないつもりのようだ。ここで返事をしてしまったら俺はスコトゥスとは何の関係もない日本人になり、彼の生涯を追えなくなってしまうような気がしたので、返事をしなかったのだが、

「ゴトー君の好きな生物だよ、行かなくていいの？」

レイカは隣に座ってページをめくりづらくしてきた。本読んでるなんて珍しいね、と事典を覗きこんでくることでどの項目を見ているかもわからなくする。別に生物を放っておいて本を読んでいたって構わないだろう。勉強が嫌いでも生物だけは好きなのと同じことだ。

「今は生物が嫌いで本が好きなんだよ」

「私だって生物嫌いだよ、キャラ被せてこないで」

ふざけた言葉だ。県内十位以内に入れる学力の持ち主が言うべきセリフじゃない。そう言いかけたが、かといって勉強が好きとは限らないとしっぺ返しを食らわされると予測し、事典を閉じることにした。まぁ、これでレイカもサボれなくなったから、おあいこだろう。

「俺の授業で不真面目になったらいよいよ救いようがなくなるぞ、お前」

遅刻の謝罪は形式どおりに済ませたが、ババ先生の言い分はごもっともだ。とはいえ、冗談めかしてなだめてくれる上に、俺の置かれている状況を的確に言い当ててくれる先生の許を離れるなんて考えもしないが。一方レイカは、問題児を捕まえてきたことを褒められていた。

スコトゥスにまつわる情報は兄貴のパソコンから仕入れる他なかったのだが、運悪くデートにかちあってしまった。今日はおっぱいの小さいバイト先の同僚だ。ドアの音を消してくれた声を分析しつつ、冷凍庫を開くと業務用のバニラアイスが仕入れられていたので、マグカップでパフェを作る気が湧いてきた。フレークを底につめてアイスをかぶせ、これまた業務用のホイップを重ねてバナナを敷き詰めチョコレートシロップをかければ出来上がり。スプーンでほぐしている分にはウマくて仕方ないが、赤いカップを眺めながらベッドのきしむ音を聴いていると、やっぱりパフェは透明のグラスで作るべきだと認識は確かになる。様々な具材が折り重なっている姿を目でも楽しめるから美味しいのであって、舌だけで楽しんでいてはパフェではない。家にはそんな演出を助けてくれる適当なグラスは存在しないから、口の方から覗いてデコレーションの一部を眺めるしかないのだが、それがいかにもさもしくて一気に空にしてしまった。とはいえ、中身が空になった赤いマグカップの断面を見つめているのも寂しい。寂しさの中でおっぱいの小さい女の子が精いっぱい張り上げた声だけが響く。彼女だって、自分が兄貴の本命だと思っている。サークルの仲間も、高校の同級生も、院生の先輩も。この家で鳴り響いた声を兄貴に当てつけるようにもう一度反響させていても、天井越しにいるドン・ファンには届いていかない。ひょっとして、兄貴自身も誰を本当に愛しているかわからないんじゃないか……寂しさが募るのに耐えきれなくなってダンスホールへと向かうことにした。

時間が経つ中でスコトゥスにまつわる認識は不安定になっていく。ともかく名前だけでも覚えやすいようにしなければ調べる余地もない。だから、経歴を勝手に作り上げていく。

有名なダンサーである彼が四十二歳という若さで亡くなったのは、独自に編み出したダンススタイルを披露したところ、あまりの革新性に観客が興奮しすぎて乱闘騒ぎが起こってしまいスコトゥスまで巻き込まれてしまったせいだった。ダンスに対する探究心が強すぎたために「精妙博士」と呼ばれるほどだったが、自由奔放なスタイルを求める派閥と対立しており、乱闘騒ぎに巻き込まれ死亡に至ったのもドサクサにまぎれて暗殺されたのではないかという見方がもっぱらである。dunceが「のろま」を意味するのもひとえに、一つ一つの動作を重視するがあまりリハーサルで一曲踊りとおすのに何十分もかかってしまうからだ。彼は人間がダンスを操るとは全く考えておらず、その逆に、ダンスが人間を操ると考えており、あたかも神の啓示を聴くかのごとくダンスの方からふさわしい動きを教えてくれるのを待ち続けていた。だからこそ、自由奔放なスタイルを奉ずる連中の言い分には耐えきれなかった。ヤツらはダンスのおかげで食っていけると考えてはいない、あたかも犬を散歩させるかのごとくダンスを扱っている、逆だ、犬だって人間を散歩へと心を向けさせるように従順なフリをしているだけにすぎないんだ……。

「よう、今日は調子悪いな」

パフェをつついていると、シーさんが声をかけてきた。どのあたり

が、と訊いても詳しくは言えないようだったが、なんでも楽しそうにダンスをしていないらしい。少なくとも今はダンスに比べてスコトゥスについて考える方が楽しい。
「シーさんはさ、ダンスしながら神を考えたことってある？」
「ハハッ、ふざけたこと言い出すな。神様が見てたら罰しか与えないんじゃないか？」
シーさんが指さす先では、シャツのボタンを開けてブラジャーをさらけ出した女が店長を立たせてポールダンスといわんばかりに全身をくねらせている。
「でもあれって、元をただせば男の体を見立ててるわけだから……」
「コピーの上にコピーを重ねてるわけだ」
ブラジャーは肩ヒモが外れて今にもおっぱいが露わになってしまいそうだ。パッドのおかげでズレたところで問題はないのだけど。
「あるべき姿に戻った、とは言わないんだね」
「宗教によっちゃ姦淫も罪になりかねんからな」
スコトゥスは紊乱を極めたダンスフロアに入り浸りながらも聖書を読むことは忘れなかった。人間の体は神の被造物である、聖書の記述は曲げられない。その可能性を最大限に引き出そうと努める行為はすなわち、神への敬虔を示す祈りと同義なのである。
「本物も偽物もひっくるめて愛してくれる神様なら信仰するんだけど」
「だったらこの世にいる人間はみんな神を信じてるってことになるな」
今日のところは「Dunceについて教えてくれ」とメッセージボードに書きとめて引き上げた。aとuが間違えていると抜かすヤツはその時点で相手にするまでもない。

＊

フットボーラーがファンから愛され続けるには、なにより鮮烈な第一印象を残さなければいけない。人間は一目惚れから抜け出せない生き物なのだ。これまで見てきたプレイとは一味違うパフォーマンスに出会った時、人は情報を処理しきれずに思考停止に陥ってしまうだろう。だからこそ、人々はスタジアムに足を運び続ける。あの時見せてくれた衝撃的なプレイの意味を明らかにするために、あるいは、再び我々の理解からはかけ離れたプレイを見せてくれる瞬間を見逃さないために。
その意味において、ベッカムは過不足ない“デビュー”を飾った。九六年のリーグ開幕戦にて、ハーフラインでボールを受けると、ベッカムは突如左腕を大きく振りかざした。どうやら、相手ゴールめがけてボールを蹴りあげるらしい。とはいえ、ハーフラインからゴールまでは五〇メートルあるのだ。よしんばボールが枠内を捉えたにしても、キーパーが反応するには十分な滞空時間が掛かってしまう。この細身にして金髪をなでつけている、バッキンガムに住んでいそうな坊ちゃ

んの企ては、無謀に他ならないというわけだ。蹴りあげた瞬間、キーパーもこの愚行をたしなめんとばかりに後ろへと下がっていった。しかし、思いのほかボールには勢いがある、おいおい、スピードの割にはしっかりとゴールマウスを捉えているじゃないか――あわてて手を伸ばして飛び込んだキーパーは、ボールと一緒にゴールネットへと突き刺さっていった。

もっとも、こうしたプレイ自体は（技術が必要とはいえ）キーパーが蝶々にたぶらかされでもすれば一年に一回は見られるものだ。この貴公子が平民と違っていたのは、ボールを受け取ったと同時に、背筋を伸ばして悠然とゴールを見据えた点である。普通ならば功を焦って猫背になってでも蹴りだすところだが、ベッカムはキックしてからも姿勢を保ち、ボールが描く放物線を見守っていた。誇張すれば、彼にとってゴール出来るかどうかは問題ではないのであろう。終始均整の取れた態度を取り続けていられるかどうかが、最大の関心事だった。

ファンはファッションとフットボールを両立させる新星に愛を寄せたが、それはチームメイトとて同様だった。キャプテンのエリック・カントナは、このゴールが決まる前からベッカムを練習のパートナーとしている。若き有望株から放たれる正確なパスは、エースによって豪快にゴールへと叩き込まれる。そんな光景を象徴とするように、二人は対照的な特徴をもっていた。育ちの良さそうなベッカムに対して、カントナはギャングそのものであり、一メーター九〇の巨躯を持つ上に坊主頭でヒゲまでたくわえている。カントナのファンサービスといえば罵声を浴びせてきた観客にカンフーキックをお見舞いするといったものだし、引退してからは俳優業に精を出しているものの、ベッカムの垢抜けた佇まいに比べてイロモノの感はぬぐえない。

もっとも、「チームなんてどうでもいい、俺が目立てばいいんだ！」と思っている点では、彼らは間違いなく似た者同士だった。自分の信念を遠慮なく言葉にしたカントナと、韜晦を続ければファンから愛され続けるとわかっていたベッカムという違いがあるだけで。

同じユニフォームをまといながら、ベッカムはカントナを参考にライフ・プランニングを進めていた。破天荒なギャングの跡を継いだのが愛想の良い美男子となれば、上手い具合にコントラストを作り出せるから人気は高まっていくだろう――そんな出世のための目論見を知ってか知らずか、キャプテンは正確なボールを蹴れと要求し続けた。どういう態度を取るにせよ、目立つことを考えるのならば努力だけは忘れないでおけとアドバイスするかのように。

ベッカムがイングランド代表にも招集されるようになると、カントナは伝統あるエースナンバー「7」を明け渡すためにピッチから去った。少なくとも実力において、ベッカムはナンバー「7」にふさわしい選手となっていた。問題は、精神面において卓越したプレイヤーになっているかどうかだった。カントナなら、ブーイングを浴びせられても相手をタコ殴りにしてしまえば勲章として語られるだろう。だがベッカムは、苦境にあってもヤケになってはいけないと自分を律さなければならなかった。こうして彼は初めての大舞台である、フランス

ワールドカップに臨むこととなる。
　決勝トーナメント初戦の対アルゼンチン戦、ベッカムは予選リーグでゴールを決め、意気揚々とこの日を迎えていた。ファンに愛されている上に、容姿もよく、実力も確か。そんな若造に嫉妬を向ける人間がいてもおかしくはない。アルゼンチン代表のキャプテン、ディエゴ・シメオネはその中でも最も狡猾な選手だったろう。この選手は相手の性格を見抜く力があった。なんでも田舎生まれの成り上がりだそうだ、きっと自分一人で自信を支えているに違いない、ちょっと上手くいかないことがあればすぐにボロを出すだろう……試合開始から反則スレスレのボディコンタクトがベッカムを襲った。全ては審判の見えないところで行われ、違法を訴える声は証拠不十分として棄却される。膝で背中を蹴られても、ほかならぬ被害を受けた身体が一部始終を隠してしまう。倒れた際に圧し掛かられても、勢い余っての事だからやむなしと情状を酌まれる始末。いよいよ耐えきれなくなって、義憤に燃える青年は倒れ伏しながら卑怯者を蹴りあげた。きっとこれも起き上がった拍子の事故とみなしてくれるだろうと、ヘボ審判への当てつけを見込んで。しかし、彼の演技はあまりに下手糞だった。レッドカードを掲げられ退場を命じられたのはシメオネではなく、ベッカムの方だった。
　アルゼンチンに敗れた翌日、イギリスのメディアは一斉にこの大根役者を罵倒する。カントナには観客にカンフーキックを浴びせたシーンこそ人生のハイライトだと言うだけのふてぶてしさがあったが、ベッカムはこの時引退を考えたという。狡猾な選手やヘボ審判に対する復讐心はあったが、ファンを見返してやろうという反骨心はなかったらしい。
　これに見かねて手を差し伸べたのが、マンチェスター・ユナイテッドの監督である、アレックス・ファーガソンだった。ベッカムをスターダムに押し上げた恩師にしてみれば、やれやれ、と言った心境だった。田舎町から“養子”として預かって以来、この子供には手を煩わされっぱなしだったのだ。カントナが暴挙によって出場停止になっていた間、若い選手を中心に据えたチームは苦戦を強いられ、メディアからもユースチームで戦おうなんて笑わせる、と言われたものだが、きっとお前ならやれると声をかけ続けた末に、リーグ優勝を成し遂げた。ヴィクトリアとかいう売女のようなポップスターを嫁に迎えた時も、性病を疑う声に苦しむ“息子”に対して、こう声をかけたものだ、お前は観客とサッカーをするわけじゃなかろう……何も変わっちゃいない、いつもと同じ事が繰り返されるばかりだ、きっとこれからもそうに違いない、なにより全ては初めからわかっていたことである、この程度の苦労なら買ってでも引き受けよう。

＊

「ねぇ、あそこに連れてってよ」
　ホームルームが終わるとレイカが声をかけてきた。ラブホテルに？

と訊ねてはみたが、お気に召す答えではないらしく、平手打ちのポーズを取って頬に手を添えてくる。
「ダンスホール。今日は友達と遊びに行くって連絡済み」
ラブホテルと何か違いがあるんだろうか？　ダンスの種類が違うだけなのだが。もっとも、レイカと手を取り合って踊ったことはない。シャル・ウィー・ダンス？　と誘いかけようものなら、レイカは意味をそのままに受け取って、代わりにあなたの良く行くお店に連れて行ってよ、と言う。まかりまちがっても、優等生が行くような場所ではないのに。少女の将来を思ってだとか、親御さんへの責任を取るのが面倒だとか、言い訳は色々と考えられるのだろうが、つまるところお前には似合わない場所なんだよ、と言って俺はつないだ手を離してきたのだ。
「ゴト―君がそんなに冷たいと、そのうち一人であそこに入り浸っちゃうよ」
「その前に店長やシーさんに追っ払われるだろ」
ニッタまで入り浸らせている時点でフーエーホーに抵触しかねないのだ。荷物は軽い方がいいだろう。
「じゃあ余所の店に入り浸る」
本末転倒だ、と言いかけたが、愛想を尽かすぞ、とのメッセージとも取れる。愛する人を大事にしろ――親父が言いそうな事に従ったのに、何でこんな目に遭わなきゃいけないんだ？　やっぱり、親の言う事なんて聞くべきじゃない。
後ろにレイカを引き連れながら、このままラブホテルに連れ込んでここがダンスホールだよ、と言えば話が丸く収まらないだろうか、と思いつつ校門を抜けると、道の向こうから黒人が手を振っていた。目線がこちらを向いている。初夏とはいえベージュのポロシャツに短パン。懐の余裕がちょっとくらいの涼しさでも我慢させるってなつもりか。
エキゾチック・パブのスカウトだろうな、とレイカを後ろに隠したが、それでもひるむ様子はない。むしろ俺に用事があるらしく、指を差して何やら声をかけてきた。振り向いて通訳を仰ぐが、英語ではないそうだ。
「アナータガ、ゴー・トークン？」ようやく日本語らしい声が聞こえてきた。
「マイネームイズ、ドゥンス……」
とぼけたつもりだったが、よく考えれば英語を解さない可能性がある相手だった。ところが、お望みの答えに巡り合ったかのごとく黒人はオーと声を上げ両手を広げた。そうしてスマホを取りだし、「Dunceについて教えてくれ」と汚い黒字で記されたホワイトボードの写真を示しながら、こう言った。
「ドゥンスニツイテ、シッテール」
よりによってそこだけしっかりとした日本語をしゃべりやがって。もしかして練習でもしていたのだろうか。
にこやかな顔をしている黒人に対して、どんな態度を取っていいも

のか迷った。スマホに写る汚い字を書いたのは俺だ。が、あの頃とは違ってドゥンス・スコトゥスなんてどうでもよくなっている。もっとも、逃げ道がないわけではない。Danceじゃないよ、Dunceだよ、と言えば勘違いとして扱われる可能性が残っている。失望するには違いないが、被害は最小限に抑えられるだろう。今は勘違いに賭けるしかなかった。偉大なるダンサーについて語り合えるはずだった少年が、彼を忘れ去った世間と同様の冷たい反応を示すなんて、耐えきれない事実だろう。

しかし、意に反して相手は小首を傾げた。精いっぱいのジェスチャーで、ダンスなんて教えてほしくない、ドゥンスについて教えてほしいんだ、と伝えたが、黒人はわけのわからないジェスチャーで返してくる。唯一つかみとれるのはスキンヘッドを手でなでつけた意味くらいのものだ――ズラが取れそうな天気だな――雲がまばらに広がっている空を見上げているのだから、間違いない。

「もしかしてさ」それまで黙っていたレイカが口を開いた。「この人もaとuを間違えてるんじゃないの？」

どういうことかわからずに、目の前の男の青い瞳を見たところ、まばたきをしながらこちらを見つめているので、疑問を抱いている点において俺達は一緒らしい。段々とコミュニケーションが取れていると感じた。

「要するに、この人もd・u・n・c・eっていう風にスペルミスしてるってこと」

もう一度青い瞳を見据えると、再びスマイルが浮かんだ。女子高生の口からスペルマなんて言葉が聞けるとは、と喜んでいる可能性もあるが、ともあれ、途端に親近感がわき上がってきて、ダンス、もとい、ドゥンスをレクチャーしてもらいたいという気が湧いてきた。

彼の名前はグルークと名付けた。文脈を頼りにそう呼んだところ嬉しそうにしていたのだから、間違えていたとしても構わないだろう。アメリカから来たのかと訊くと、首を振った。ブラジル、メキシコ、サウジアラビア、知っている国をとにかく挙げてみたが、すべて違うと答えられた。試しにスコトゥス、と言ったが、そんな国はないとレイカにとがめられてしまう。

セイジによって国を追い出された、とグルークは言った。

「セイシ、ナイ」

政治によって窮地に追い込まれたのならば、精子だって枯れるだろうし、生死を賭けることにもなるだろう。どの道、死活問題というわけだ。

それからはレイカも理解出来ないほどの複雑な話が続いたが、ドゥンス、ドゥンス、と連呼していることから、彼がダンスに全てを賭けていること、それから自分の持っているすべてを俺に伝えようとしていることは知れた。

それに、悔しそうに日本に来た経緯を話している様子だけでも何もかもわかるものだ。おおよそはこんなところだろう。彼の祖国ではダンスのスキルこそがステータスであり、出世するにも支配者に媚態の

舞を披露することが必要なのだ。グルークはホープであり、皇帝の寵愛を得られたものだけがのし上がれるシステムに疑問を抱く者だった。ダンスは国民全員によって自由に踊られるべきものだ。誰もが疑いえないパフォーマンスを見せれば、この国は変わるだろう。しかし、彼の努力が実を結ぶことはなかった。というか、陰謀によって夢への道は閉ざされてしまった。

あいにく我が国のダンスに対する風当たりだって最近はよろしくないが、グルークにとってみれば生ぬるいものだろう。もっとも、沸騰に向けてのトロ火は焚かれていると見ている。今のうちに優秀なダンサーを育て、権力に対抗出来るだけの力を蓄えておかなければいけない。少なくともこの国ではまだ、踊る力があれば社会は変えられるのだという分析のもとに。

だけど俺だって、自分より力の劣るダンサーに師事するつもりはなかった。いかに彼が祖国では有数のダンサーとはいえ、いまだに前時代的なテクニックに頼っている可能性もあるのだ。まずはダンスを見せてくれる？　とレイカの通訳を介して伝えると、自信ありげにうなずいてみせた。

「じゃあ行こうぜ……お前は来るなよ」

「私がいなきゃ何言ってるか全然通じないでしょ」

店長にはＪＫパブのキャッチから逃げ切れなかったと言っておいた。幸い、平日の夕方は静かな雰囲気が店を包んでいる。客がまばらに席を取り音楽だけがうるさく流れるだけで、ステージもガラ空き。これなら何一つ魅力に感じることなく帰ってくれるだろう。レイカはきょろきょろと店内を見回しているが、霊感がない限りランチキ騒ぎなど見られやしない。

ステージはグリークのために空けられていたらしい。シーさんはすでにそのパフォーマンスを目の当たりにしていて、これなら俺にも会わせないと損だと思ったという。

「すっげーぜ、なにがすげえって、俺でも理解出来ねえところがすげえ」

胸やけがうつりそうな息を吐きかけながらシーさんは言う。グリークがステージを上っていって、ライトが点いていないから顔色はほとんどわからなくなった。ＢＧＭが途端に消えて、客も何事かとステージへと注意を向け始める。スキンヘッドが灰色に照らされたかと思うと、前傾姿勢を取る黒豹が姿を現し、イントロと共に動きだした。

＊

有能なる監督アレックス・ファーガソンのおかげでベッカムは立ち直り、その後チームとともに最盛期を迎えることとなる。ワールドカップの翌年、マンチェスター・ユナイテッドはあらゆるコンペディションで強さを見せつけ、三冠の快挙を達成した。

特筆すべきはヨーロッパ最強のクラブを決するチャンピオンズリーグのファイナル、対バイエルン・ミュンヘン戦。このドイツリーグ

チャンピオンが有利に試合を進め、〇対一のまま勝敗は決するかに思われた。トロフィーには今や遅しとバイエルンのロゴを認めたリボンが巻かれていく。その瞬間をベッカムは見逃していなかった。怒りのあまり吐き気さえ催した彼は、試合終了間際のコーナーキックを苛立ちながら、それでいて正確に蹴りあげる。勝利を目前に浮き立っていたバイエルンのディフェンダー達は処理を誤り、結果、シェリンガムによる同点ゴールを許してしまった。動揺を抑えきれないバイエルンは、延長に逃げ込む事も出来ず、またもコーナーキックを与えてしまう。ベッカムは容赦なく鋭いボールを放った。いつもと同じフォームで、態勢を崩すことなく。シェリンガムの頭に届いたボールは、ゴール前で待っていたスールシャールへと渡り、ゴールへとダイレクトで蹴りこまれていく。あとはユナイテッドの勝利を告げるホイッスルが鳴るだけだった。

その後、精密機械のような右足はイングランド代表の危機も救い、かつての汚名は完全に雪がれたかに思われた。日韓ワールドカップこそ、骨折の影響により本調子のプレイは見せられなかったものの、かつてのような罵詈雑言は聞こえてこない。この救世主がいなければ極東へのチケットは手に入れられなかった上に、足をひきずらせてまで旅のご同行を願ったのだ、これ以上高望みをすれば罰が当たるというものだろう？

国の威信をかけて闘った選手達に向けて、エリザベス女王はバッキンガム宮殿への招待状を送った。普段ユニフォームを着て荒々しくプレイしているフットボーラー達が、いまさら宮殿の仕来たりに恐縮することなく従えるはずもない。そんな中、何を間違えたのか選手達の列に王族の青年が、端正な佇まいを保ちながら混じっている。いや、鍛え上げた肉体がスーツ越しにうかがえるからフットボーラーなのか、もしかしたら王族のご依頼で極東調査にでも派遣された、ともかく由緒正しき方なのだろうか……国民はそんな風に謁見の様子を見守っていた。

一方、ファーガソンは怒りを込めてテレビを見つめていた。あいつは骨折のリハビリを途中で切り上げて極東へと向かったのだ、となれば次のシーズンへ向けて一刻も早くコンディションを整えなければならないのである、女王陛下から与えられる名誉がなんだ、フットボーラーはフットボールによって名誉を築き上げていくべきだろう！

とはいえ、女王との謁見だけならファーガソンも目をつむったかもしれない。彼だって大英帝国からサーの称号を贈呈されているのだ。問題は、“息子”がフットボールをおろそかにするのは今回が初めてではないということだった。とくに芸能人であるヴィクトリアと結婚してからは怠惰に拍車が掛っていた。ミーティング中にデートの約束を取り付ける電話がかかってきて集中を削いだこともあれば、ファッションショーに精を出す妻の代わりに子供の看病をして練習を休んだこともある。加えて、日々名声が高まることによって舞い込んでくる取材要請に応えることで練習の時間はさらに削られていった。これまではベッカムが結果を残していたから良かったものの、“舅”と妻

の機嫌を取るための綱渡りは荒業だった。そして均衡は、日韓ワールドカップの翌年に崩れていく。

ある試合の前半終了後、ユナイテッドのロッカールームではいつも通りファーガソンの怒号が響いていた。矛先はベッカムに向けられている。なんでも相手選手のマークを怠って失点の原因となったとのことだ。まぁ、ここまで何十試合もこなしているのだから、疲れているのだろう。チームメイトは事態を深刻にとらえていなかった。それよりも後半に備えることが大事だ、たとえ“親父”がシューズを蹴り飛ばそうが……しかし、シューズの金具はベッカムの左眉をかすめた。

事態はヴィクトリア――メディアのやり口を知りつくしているゴシップの女王――によってリークされ、新聞記者の飯のタネとなった。ベッカムが事件後初めてファンの前に姿を現した際、これみよがしに傷口を晒したことで、ファーガソンも言い訳は出来なくなっていく。

それにしても、男前の左眉に貼られたテーピングはマヌケだった。傷は眉に沿って直線を形作っているのに、二枚のテーピングは傷口の真ん中を中心として「×」印を作るばかりで、治療の事なんかまるで考えていないのだ。観客に向けて同情を引くにも、我々は悲劇を見に来たのだが、と踵を返されるのがオチだろう。自分一人でそんな策を選んだのならばオツムが弱いことは疑いようがないし、弁護士か妻にでも入れ知恵されたなら尚更だ。

もっとも、当時二八歳の大人がそれまで取ってきた態度を鑑みれば、失望するほどのことでもない。この男はフットボール以外の報復の手段を知らないのだ。シメオネに嵌められた時も拙い立ち回りしか出来なかったし、痛がるフリをして時間を稼ぐ相手選手めがけて正確なボールを蹴りつけたこともある。そうしてフットボールでやり返せないとわかると、たいてい他人にすがりつかざるをえない。ファーガソンなり、メディアなり、あるいはヴィクトリアなり。

とはいえ、繰り返すことにはなるが、フットボールで報復が出来るなら彼は無類の力を発揮するのである。事件の二カ月後に行われた、チャンピオンズリーグの準々決勝、対レアル・マドリー戦。ファーガソンはベッカムをベンチに据えていた。いうまでもなく懲罰である。もっとも、世界最高クラスのプレイヤーを複数擁するチームを相手に、中心選手を欠いては太刀打ち出来るはずもない。リードをじわじわと広げられ、勝利への望みが絶たれていく中、どういう風の吹きまわしか監督は反逆者をピッチに送る。

すぐさまフリーキックのチャンスが訪れた。ベッカムはいつも通り左手を振りかざし、キーパーが一歩も動けないほどの美しいシュートをゴールへ送り込む。勢いを取り戻したユナイテッドだったが、時間は残されていなかった。やけくそにでもボールを前線に送って奇跡を待つしかない。無理にでもシュートを打ってキーパーのミスを誘うしかない。ようやくボールがゴールへと転がっていくが、ディフェンダーもフォローに走っている。だがそれよりも先に、背番号「7」の右足が伸びている。

しかし、その二つのゴールで勝敗が覆るわけでもなく、ユナイテッ

ドは敗れた。ベッカムはチームを去り、この時の対戦相手であるレアル・マドリーへと移籍することとなる。師弟関係が崩壊した理由を探ろうとするジャーナリストは、シーズンが終わってからも後を絶たなかった。旧時代のフットボーラーであるファーガソンと、新時代のフットボーラーであるベッカムという御大層な対立構造を作り出す者もいれば、若手にチャンスを与えることでチームを活性化する狙いがあったと結果論を語る者もいる。

ハッキリしているのは、“父親”が自分の言う事を聞かなくなった“息子”を放逐したということだ。差し詰め、これまで育て上げてやったのはワシだというのに、甘い言葉を並べるスポンサーやビッチにうつつを抜かしおって、といったところだろう。ヤツは人間としても、フットボーラーとしても、一人では何も出来やしない。誰かに助けてもらいながら生きていくしかないのだ。

そんな恨み節は的外れでもなかった。元々マドリーには、ベッカムを招く必要のない戦力が揃っている。それでもなお獲得に動いたのは、彼が引き連れてくるスポンサーから多額の資金を吸い取れるからだった。スポンサーの庇護がなければ、移籍交渉はまとまらなかったかもしれないのだ。

念のため付け加えれば、実力がなかったわけではない。ユナイテッドでの功績は言うまでもなく、マドリーに入ってからも広告塔として出場させるために慣れないポジションを任されたが、与えられた役割はしっかりとこなし続けたし、右足のキックはチームでも一、二を争うレベルだった。とはいえ、涙ぐましい努力が勝利に結びついたわけでもない。ベッカムを出場させるため、チームは大きくバランスを崩した陣容で臨んでいたのだ。

結果、三シーズン続けてマドリーはタイトルから遠ざかっていった。いくら人気のある選手を擁していても、勝てなければ収支の折り合いは悪くなっていく。方針を転換した首脳陣は、フレッシュな若手を多く獲得して現場の刷新を図り、一方でベテランを粛清した。補強費を捻出してくれるベッカムはひとまず残留させたが、ベンチ以外に与えられる居場所はなかった。

＊

「精子と卵子でもわかる通り、二つの細胞が一つに融合して生殖が果たされるのが普通なんだが、ゾウリムシの接合はちょっとわけが違う」

ババ先生は黒板にゾウリムシの絵を描いていく。だけど細胞内部の図が雑すぎて、明太子を思い出させた。とりあえず、大きな核と小さな核の二つが見える。

「二匹のゾウリムシは一つにくっつくが、融合はしない。二匹の境界はくっきりとわかれている。それから小核が分裂して四つに分かれるが、残るのは一つだけ。あとは捨てられる。これが再び分かれて、片方が口を通じてもう一匹の方へと運ばれていく」

とくに描き加えることなく説明されていく接合の様子は、頭の中で

動画を組み立てるしかない。口が開いて、喉の奥には核が覗く。赤黒く、脈打っているそれは早く相手の鼓動を感じたいと言っているようだ。お望み通り、口を差し入れて取りだしてやる。そして呆けたように開けっぱなしにしている口を、内側からえぐりだした核で塞いでやる。

「残していた核と、交換された核が融合して受精核となる。ゾウリムシはまた二つに分かれるだけだ。細胞内部で受精核は分裂を繰り返して、大核も巻き込んでごちゃ混ぜになっていく。やがて新しい大核が現れ、古い大核は細胞分裂の手助けをするだけになって、若返りに成功。おかげさまでゾウリムシの寿命は延びて、めでたし、めでたし」

ちなみに、古い大核は細胞分裂と共に消えていく、と言ってチョークが置かれた。最終的にはゾウリムシの内部に大きな核が二つ、それから小さな核がいくつか散らばっている[4]。とりあえず明太子を思い出すことは避けられたが、今度はブラックホールだらけの生き物に見えてきた。

「でも、相手の小さな核もヨボヨボだったんでしょ。なんでそれで若返られるの？」

「この受精核が新しい組み合わせと認識されるから。要するにこれは知らないものだから新しいものとして育てようと思う。しかも育てるべきものは自分の年齢を決めるものだから、年齢がリセットされるって寸法だ」

それで十分だろうと言わんばかりに黒板を消していった。ひとまず明太子の形をしたゾウリムシはそれでリセットされたことになる。次はどんな形をしたゾウリムシが現れるのだろう。

「接合する前と接合した後って、違うゾウリムシなのかな」

「ゾウリムシはゾウリムシだよ。今は二匹でしかやらなかったけど、こういうことが何千何万回と行われてる。目の前にいるゾウリムシ達の小核の断片が、自分の中に全部取り込まれているかもしれない。それどころか、皆が皆同じ小核の断片の組み合わせで出来ているかもしれない。個体差なんて、皆無に近いんだ」

なるほど、あのブラックホールがゾウリムシをことごとく吸い取ってしまうのか、と黒板に描かれていた核だらけの姿を思い出す。次に、レイカの顔が浮かんでくる。レイカとキスしたら、俺の中の何かはあいつへと移って、あいつの中の何かは俺へと移る。俺は劇的に変わってしまうだろうが、レイカは変わるのだろうか？　やっぱり不真面目になってしまうのか、それとも何かが間違って真面目になっていくのか。どっちも虫唾が走る。ほどよく真面目で、ほどよく不真面目のレイカのほうが、ずっと大好きだ。

「面白いね、口移ししたおかげで生まれ変わるって。しかも、恋人の核と一緒にずっと生きていくわけか」

「浮気者だからずっと、ってわけにはいかないけどな」

---

[4] ゾウリムシの接合についてはこちらのサイトを参照した（http://mikamilab.miyakyo-u.ac.jp/Microbio-World/kansatu/zouri/setugou/setugou.htm）。

「なるほど、ゾウリムシに生まれたかったな」
「それじゃお前の個性もなくなっていくぞ」
ぶっきらぼうに椅子へと座り込んだ先生は、窓へと目を向けながら溜息をついた。そろそろタバコが恋しいらしい。吸ってきなよ、と言ったが、切らしてしまっているようだ。
「ま、何事も自分に引きつけて考えないことだ。ゾウリムシの世界はゾウリムシの世界だし、ミドリムシの世界はミドリムシの世界である」
ニコチン中毒とモットー中毒が混ざった蹴りが机を転がした。でも、こうして余所の世界を覗き見するのは人間ならではだよね、と言いかけたけど、そりゃ哲学の話だ、とまた怒られてしまうのでやめにした。
ゾウリムシのように人間が生きられたら、と思い描いてみる。人間が不死に近付いたら地球がパンクしてしまっておしまいだろうが、キスするだけで生まれ変われる世界がどこかにあるのはいいものだ。老いぼれた爺ちゃんと婆ちゃんが、キスをしてお互いの細胞を交換し合い、人生を再び育んでいく。難病に冒されようと、不慮の事故が見舞おうと、キスをすればやり直せる。取り返しのつかない失敗をして、路頭に迷っている時、同じような面を浮かべた女が向こうからやってきて、言葉が無くてもお互いを理解しあい、唇を合わせる――ああ、生まれ変わったら記憶はなくなってしまうかもしれないから、爺ちゃんも婆ちゃんもまた出会えるとは限らないのか。けれど細胞はお互いの中で生き続け、遺伝子にも似た、変えようのない事実としてお互いを支え続けていくのだろう。それで何も問題ない。皆が薄々、誰かのおかげで生きているのだとわかっていれば。
ハッハー！　という高笑いが公園から聞こえてくる。遠くで黒人と日本人がワン・オン・ワンをしているのが見えた。まだまだ世界の壁は高いらしく、黒豹があっさりと抜き去って未熟なサルはあえなく芝生に倒れていく。巧みにボールを操るグリークを見ながら、ニッタは悔しそうに叫び声を上げた。ドゥンス！　というコールとともに黒い手が大きく振られる。
「サッカーサボってダンスなんかやってるから負けるんだよ」
煽り文句を気にも留めず、ニッタはあっけらかんとした様子で起き上がった。
「グリークはダンスやっててもサッカー上手いじゃん」
指差されたグリークは褒められているとわかるらしく、それほどでもない、とばかりに手を振った。
「ダンスが上手けりゃサッカーも上手い。だけどサッカーが上手くてもダンスが上手くはならないってわけだ」
「どういうこった？」
「お前もそろそろサッカーに専念したらどうだって話」
「ははっ、負けたからには言い返せねえな」
グリークは聞いていたのかどうか、脈絡もなくボールを俺に渡してきた。下手糞だからノーサンキューとボールを返しかけたが、自分の言葉には責任を取れと言っているのか、顎を軽く振ってくる。まぁ、

ワン・オン・ワンをやろうとは聞いていないからヘソを的にして思い切り蹴りつけてもいいわけだ。が、すんでのところでかわされた。その勢いでニヤケ顔を浮かべながらこちらに近づいてくる。
「ビックリ、ビックリ！　カンベン、カンベン！」
　ニッタとともにゲラゲラと笑うグリークに対し、わざとらしく指を鳴らしてやると、敵わないと言うように首を横に揺らし続けた。
「ドゥンス、オシエテヤラナイ」
「ボールを当てたら教えてくれる？」
「俺なら間違いなく当てられるね」
　グリークは首を振りながらニヤニヤとしていた。もっとも、言葉がわかったところで怒ることはなかっただろう。

＊

　人はヴィクトリア・ベッカムをエゴイスティックなワイフだと評するが、最初にアプローチを仕掛けたのはデイヴィッドの方だという事実を忘れてはならない。デイヴィッドが工業地のファンの心をつかみ始めていた頃、ヴィクトリアはスパイス・ガールズのメンバーとして世界的なムーヴメントを起こしていた。抜群のスタイルを持つポップスターを画面越しに見ながら、田舎生まれのサッカー少年は興奮のあまりチームメイトに向かって、彼女と結婚する、と宣言して憚らなかった。いざ面会の機会を得ても、試合が終わったばかりで汗だくになっているからきっと嫌われてしまうと思って、まともな会話さえ出来なかった。自分に向けられた目線を分類する能力に長けたエンターテイナーにとって、それだけでも乳臭い男の胸の内を察するには十分だった。元々、二人の身分はそれほどかけ離れていたのである。
　とはいえ、スパイス・ガールズにとって、ヴィクトリアは数合わせだった。歌唱担当にセクシー担当、それからキュート担当もいるし、ボーイッシュ担当まで揃えている、これでひとまず何とかなるだろうが、予定では五人スカウトするつもりであるから、高飛車担当も入れておけば男には簡単に媚びないグループとして認知してもらえるか――そんな算段に基づいて採用された女は、歌も下手だったし滅多に笑いはしなかった。裕福な階級に生まれながらも、それゆえに反感を買いやすかったヴィクトリアは、コケットリーに振舞ったところで売春婦同然に男にかしずくことにしかならないと知っていた。それならば多少の反感を買ってでも自分らしく生きた方が、ずっといい。
　メディアが何と言おうと私は働き続ける。なんでもフットボーラーは大抵三〇代でキャリアを終えてしまうというではないか。人生においてはまだ倍の月日が残っているのに。特に、妻に頭が上がらないような男が監督やコーチとしてやっていけるようには中々思えない。それならば早い内からフットボール以外の稼ぎ口を確保しておいた方がいいに決まっている。夫にも、いつ怪我でキャリアを終えてもいいようにファッションアイコンとしての立ち回り方を教えておいた方

がいいだろう[5]。

このキャリアウーマンは家を空けてあちこちで商談を進め続けた。かといって家政婦は雇わない。それでは夫の頭の中から家庭の概念が抜け落ちてしまう。試合と試合の合間は、たとえリフレッシュが必要であろうと家事を任せ続ける。そうすれば確固とした家庭への愛着が生まれ、穏便な老後を迎えることが出来るだろう。

レアル・マドリーがデイヴィッドを必要としなくなった時、ヴィクトリアはすばやく手を打った。ロサンゼルスに住居を構えれば、アメリカという莫大な市場を持つ土地で商売が出来るし、言語に悩まされる必要もないから子供達も安心して青春を送ることが出来るだろう。セレブとして名が通っている割に、ヴィクトリアの生活感覚は確かなものであった。

ただ、一方で決定的に欠けていたものもあった。彼女は夫の職業に興味を寄せることが無かったのである。大方、アメリカはスポーツが盛んな国だからモチベーションも保たれると思っていたのだろう。が、あいにくフットボールはさっぱり人気が無かったし、まだまだトップレベルでプレイ出来るはずの夫には似つかわしくないレベルの対戦相手しか存在していなかった。要するにこの少しだけマヌケな実務家は、夫をフットボーラーの墓場に送り込むための手続きを首尾よく進めんとしていたのである。

---

[5] 〇二年に日本で一斉を風靡した“ベッカムヘアー”と呼ばれるソフトモヒカンを考案したのもヴィクトリアである。

ヴィクトリアが首尾よく新居の契約を結んだことで、メディアは一斉にベッカムのアメリカ行きを報じた。フットボーラーとしての契約は交渉段階にあったにもかかわらず。いかにトップレベルでのプレイを望もうと、そこまで来たら後戻りも出来ないから、サインにあたって躊躇する暇などない。〇七年の一月、ベッカムはロサンゼルス・ギャラクシーと契約を結んだ。

とはいえ、ロスへと住まいを移すのは、スペインでの契約が終わる七月になってからとの取り決めになっている。この間にコンディションが落ちていてはまずいだろうと、クラブは練習への参加を認めてくれた。しかし、半年後にいなくなるプレイヤーを使えばチームの士気にもかかわるし、伸び盛りの若手にチャンスを与えた方が有益だということは明らかである。とうとうベッカムはベンチからも外れ、スタンドで試合を見るしかなくなった。

だが、どういうわけだかこの男はいつも通り、周囲から面倒見よく扱われることとなる。マドリーのキャプテンであるラウール・ゴンザレスは、やたらと良いボールを蹴り続ける戦力外選手を不思議そうに眺めていた。元々ウチの中でも一番いいボールを蹴る選手だったが、よくヤケにならないものだ、それどころか、精度に磨きがかかっているような気もする、まさかアメリカでもう一花咲かそうなんてつもりでもあるまいし……あぁ、そういえばプロモーションに忙殺されても、練習は熱心にやっていたっけ、試合でも一切手を抜いたことはないな、それとなんら変わりないのだろう、要するにいかなる状況にあろうと

この男にとってフットボールは自らの心を癒してくれる、かけがえのないものなのだ。
ラウールはチームメイトを引き連れ、監督の許へと直談判に向かう。我がクラブはいまだ優勝の可能性を残している。そんな状況にあって戦力をフル活用するのは当然だろう。現在使われている若手よりも、ベッカムは走るし良いボールを蹴る。あなただってこうした事実をトレーニングスタジアムに立ってその目で確かめているはずだ。
長きにわたるベンチ生活により実戦感覚が乏しくなっていたベッカムは、かつてほどの活躍は見せられなかったが、若手をさしおいてピッチに立ち続けるだけの実力はあるのだと証明することは出来た。チームも逆転でリーグ優勝を果たし、ベッカムの最後に華を添えてくれた。それどころか、ファンからはどうにかして契約の穴を見つけて残留させられないかという声も出てくるようになる。
しかし、ロサンゼルス・ギャラクシーだってエースとドル箱を兼ねた選手をそう簡単に手放すわけにはいかない。何よりフットボールに興味のない妻は、アメリカでの生活をすでに始めている。惜しまれつつベッカムはスペインを後にした。置き土産としたのは、一度のリーグ優勝と、積み重なった営業利益だった。

＊

雨の音が二度寝を許してくれなかった。地面やら屋根やらが静かなスネアを鳴らし、意識に向かって明晰であれと促してくる。そんな声がなければ覚醒するのにやぶさかではなかったのだが、命令されるのは癪で仕方ない。俺を立ち上がらせたいなら、まずお前が命令するのをやめることだ。そうしてストライキの態勢に入る。もっとも悪い条件は揃っていなかった。雨が降る中を出歩くなんてごめんだし、このまま天候がチャチな交渉を続けているのならば学校に行く必要もなくなるのだから。
何十回も流し続けた曲に、聞き慣れない音が混ざっている。耳鳴りかと思ってイヤホンを外したところ、あれはチャイムだったのだと知らせる甲高い音が家中に響いた。
ドアを開けると、やっほ、とピースサインを作るレイカが立っていた。サボりたくなる気持ちはわかるが、お前には似合わないだろ、と言うと、なんでもこの雨をもたらしているのは台風らしい。午後には直撃するとの予報を受け、県内の学校は全て休校を選んだ。
「ていうか、メール返してくれないなんて酷過ぎない？」
「台風のおかげで宛先が変わったんだろ」
ではどこに行ったかって？　おそらく、日本海を渡ってロシアに行ったのだろう。梅雨とはいえ亜寒帯の地に不時着するのは難しく、おまけに寒々しい風に吹かれて北極まで飛ばされたのだ。そしてメッセージと共に凍りつく。あるいはクマのエサと化してしまう。
「雨が止んだら、またあそこに連れてって」
これで何度目だろう。今は弱みにつけこんでいるが、その内なんの

気兼ねもなくダンスホールに入り浸るようになるかもしれない。
「パフェおごるから、それで勘弁してくれない？」
安い女と見積もられたと思ったのか、レイカは何の返事もよこさずに家へと上がりこんできた。マグカップに盛り付けたパフェはあえなく平らげられてしまう。かといって、それでダンスホールへのチケットが破り捨てられたわけでもない。
「代わりに期末試験の勉強は教えてあげるけどね」
教えなくてもいいから諦めてくれないかな、と抵抗する暇も与えてくれないまま、机の上に教科書が広げられていく。
「英語はグリークに教えてもらうから」
「あの人英語しゃべれないじゃん。そもそも、私のためにも必要なの。人に教えることで要点が確認出来て自分で考えることになるんだから」
つくづく勉強ばっかり考えてるんだな、と言ったものの、早くノートを取ってくる、と命じられたので立ち上がらざるを得ない。せっかくレイカと一緒にいられるのに、勉強に邪魔される。学校は管理に満ちたシステムだと言われるが、どうやら恋まで管理するらしい。きっと今もどこかで高校生の恋人達がこんな会話を交わしているだろう。なぁ、どうして俺と付き合ってくれないんだよ、だってあなたの遺伝子はメンデルの法則に従うと相性が悪いんだもの。
英語は相変わらずで、数学はどうして二つのふくらみが上と下に分かれるのかさっぱりだった。現実に即していない学問に、何の意味があると言うのだろう？
昼飯はレイカが美味しい親子丼を作ってくれた。雨は止まない。けれど、レイカを引きとめられるなら止まなくてもかまわなかった。
「ずっと雨が続けばいいのに」
「学校に行けなくなるから？」
学校どころか町が水没して、この家だけが浮島になる光景を想像する。まずニッタがたどりついて、グルークもやってくる。ババ先生やシーさんがいてもいいだろう。皆にはねぎらいとしてパフェを差しだす。ババ先生がこの世界に適応する方法を教えてくれて、グリークは念願の施政者の地位へと就く。レイカはその二人の補佐役で、ニッタはサッカーボールを蹴りあげて他の浮島との交流を図る。シーさんは宴会の拍子に海へと飛び込んで死んでしまうかもしれない。店長を始めとしたなじみ深い仲間が他の浮島から弔問にやってきて、また帰っていく。そして俺は……。
やけに落書きが捗ると思ったら、レイカが眠っているせいだった。顔も見せてくれないほど疲れているらしい。ベッドに寝かせてタオルケットをかけて、少しだけ外の様子を見に行くことにした。と言っても、横殴りの雨は直に家に入り込んでくるので、出入り戸も開けられないくらいだ。
部屋に戻ると、タオルケットのふくらみがベッドに横たわっていた。もしこの中にレイカがいなくて、抜け殻だけを残していったとしたら。そんな考えが頭をよぎる。たとえば剥ぎ取ってみたら、クッションが

並べられているだけで、ほんの少し匂いだけが残っていたとしよう。メールを確認しても、台風で休校になったから遊びに行くというメッセージしか残されていない。雨は止まずに外へ出ていけなくなる。晴れの日が来ないから匂いはかろうじて感じられるが、一向に連絡がつかなくなる。

タオルケットを取れば、そんな妄想は意味のないものとなるかもしれない。けれど、せっかく疲れを取るために眠っているのだから、起こさない方が良いのかもしれない。それからはずっと、イヤホンをはめて何十回と聴いた曲を流し続けていた。

机に突っ伏しながら起きると、もう夕方になって雨も止んでいた。タオルケットが背中にかけられ、メールが残されている。眠ってる間に勉強してるのかと思ったらノートが真っ白で驚いた、といった内容だった。ちゃんと勉強しなよ、とは言っているが、何も返す気にはなれない。勉強するとは言えないし、勉強しないと言ってもレイカを怒らせるだけだ。

＊

〇三年、ベッカムはスポンサーのアディダスによって一人の男と引きあわされた。ラグビー界において屈指のキッカーとして知られるジョニー・ウィルキンソンこそ、その人である。

それぞれの競技において類稀なるキックスキルを持つ二人が、所を移して違うボールを蹴ったらどうなるか？　そんな好奇心に基づいてコマーシャルの撮影が行われたのだが、これはベッカムの人柄がよく表れた仕上がりとなっている。

場数を踏んだことがうかがえる低い声でコミュニケーションを取るウィルキンソンに対し、ベッカムはハニカんだような甘ったるい声で応じた。まずはウィルキンソンがサッカーボールを蹴る。ラグビーにおいては高々とボールを蹴り上げる必要があるから、フォームは勢い豪快になって、枠内から大きく逸れてしまう。

――もうちょっと軽く蹴った方がいいのか？

大丈夫だよ、と答えて、ベッカムが見本を披露する。いつも通りの端正なフォームで、ゴールキーパーが動けないほどのボールを蹴っていく。しかし、ウィルキンソンはポイントを見逃していない。一見軽やかな動作ではあるが、インパクトの瞬間はしっかりと強く足を振り抜いている。

――コントロールするためには軸足が重要なんだ。軸足さえしっかりしていれば振り抜いても的を外すことはない……ラグビーも同じだろうけど。

ベッカムのアドバイスによってウィルキンソンの照準はゴールへと順調に合わせられていく。しかし、豪快なフォームを崩すことはない。ラグビーの方がもっと軸足の力強さを求められるのだと、自分のスタイルの確かさを誇示するかのように。

要領をつかめば、ベッカムのリクエストに応じて右に左に卒なく蹴

り分けられるようになった。豪快なフォームでゴールに叩き込む男と、端正なフォームでボールを送り込む男、それだけでも十分絵になる構図だった。

――僕より上手いね。

――そういうことにしておくよ。

次はベッカムがラグビーボールを蹴る番だ。サッカーボールと違って、ラグビーボールは風に立ち向かう事も考えなければならない。

――風が強ければポールからズラして蹴る必要だってあるんだ。でもボールに回転が掛かっていなければ、風に押されるための勢いもないからあさっての方向に行く。

ウィルキンソンの蹴るボールは二つ並んだポールのほぼ真ん中を射抜いていく。簡単そうに見えるな、とベッカムは言う。

――回転のかけ方はサッカーと同じ？

――つま先を使って、それから腕を振ることも忘れないこと。

お得意のフォームであるにもかかわらず、ベッカムは左手を握りしめながら教えに忠実たらんとしている。腕を忘れずに、腕を忘れずに。もらったアドバイスを逐一確認しながら、ウィルキンソンが言葉では伝えきれないでいる部分を読み取ろうとしていく。

――それにしても遠いな。届くかどうか。

――自信をもっていい。何もかもしっかり頭に入れたら、あとは思い切り行くことだ。

わざとらしいほどに左手は大きく振りかざされたが、やはり態勢を崩すことなく右足は振り抜かれ、ボールはしっかりとした孤を描いた。

使えるショットが粗方撮れたので、撮影陣はオーケーを出す。二人は最後の会話を交わした。

――今度ユニフォームを送ってもいいか？

――もちろん。試合を見に行ってもいいかな？

――じゃあこうしよう。今度ラグビーのワールドカップがあるんだ……。

結局は同年に行われたビックイベントのプロモーションに、ベッカムは引き立て役として選ばれたにすぎなかったのだが、そんな中でも役割をこなしつつ、自分の魅力を伝えることは忘れなかった。大きい見返りを得るために相手の機嫌を取るが、かといって媚びるような真似はしない。相手に敬意を払いながら、自らのポジションも確保しておく。

アメリカに渡ってからの足跡については、書くべきところは少ない。ロサンゼルスは長期契約を結んでベッカムを引きとめたため、ヨーロッパからオファーが来たとしても容易にはチームを離れることが出来なくなった。後にイタリアのクラブが交渉に動くが、保有権はあくまでロサンゼルスのままで、サラリーを肩代わりしてベッカムを貸してもらうという方法でしかチームに迎えることが出来なかった。もちろん、レンタル期限を迎えればまたアメリカへと帰っていく。

御世辞にもレベルが高いとはいえないリーグに所属していようと、

ベッカムはトレーニングを欠かさなかった。当面の目標は、南アフリカで行われるワールドカップのメンバーに選ばれること。監督もリーダーシップを見込んで選出することにやぶさかではなかった。イタリアという厳しいリーグを相手にしても、いつ引退してもおかしくない三五歳は十分に、渡り合っていた。

しかし、ベッカムは試合中にアキレス腱を切ってしまう。同情と、輝かしい功績への慰労を込めながら、イングランド代表はコーチのポストを用意して彼の帯同を許した。選手とコーチの橋渡しをするという役割を与えられたが、予選突破がやっとだった結果を前にしては、効果的であったかは怪しいものだった。大会期間中、イナセにスーツを着こなし、取り澄ましながらベンチに座る姿を見せ続けたことで、監督になっても絵になる存在であるとアピール出来たのは、無駄ではなかっただろうが。

雪辱のためにロンドン五輪代表入りを目指したが、三七歳の体に若手を押しのけられるだけの力は残っていなかった。だがベッカムはトレーニングを続けた。ヨーロッパでのプレイを望み続けた末に、ようやくパリへの移籍が叶ったが、世界最高の選手であるリオネル・メッシに力の差を見せつけられた。そこで、ベッカムはとうとう引退を決意する。

こう書いてみると寂しい晩年を送ったかのように思えるが、収入の面ではもっとも財産を得ているフットボーラーであり続けた。フットボールでしか見せられなかった不屈の信念を、いよいよビジネスでも発揮出来るようになったのだ。

ビジネスとフットボールの両立を求められる時代にあって、これほどまでに規格外を示す人間もいなかった。同時に、これほどまでに自分の人生に忠実たらんとした人間もいなかった。マーケティングの餌食にされていなければ、もっと優秀なフットボーラーとして名を馳せることが出来ただろうと人は言う。ベッカムはそういう声を見込んだ上で、トレーニングを欠かさなかった。もしかしたら有り得たかもしれないもう一つの生涯への道を保ち続けることで、たとえ衰えようとも人々が夢を見ていられるように取り計らった。

大人らしく振舞っていれば、たとえマーケティングに振り回されようともフットボーラーとしては着実な人間として評価されただろうと人は言う。ベッカムはどこまでも幼稚であり続けた。ロサンゼルスでの試合中、痛がるフリをして時間稼ぎを目論む相手選手に向かって、ベッカムが怒りのあまりボールを蹴りつけたことがある。またやってるよ、シメオネやファーガソンの件で懲りなかったのかね、まったく仕様のないやつだ[6]……そうやって彼は人々の庇護欲を駆り立て続けた。

ベッカムが意図してこれらの行いを選んでいたかどうかは、あまり問題ではない。彼は自分の人生をたやすく否定しなかった。同時に、自分の歩んできた道で起きた出来事を別の場所で、そこで起きていた

---

[6] 痛がっていたはずの選手が猛然とベッカムに詰め寄るというオチがこの話にはあるのだが。

のはこういうことだったのだと説明するように何度も繰り返していた。問題はそこにこそある。

たとえばカントナの練習パートナーを務めていたシーンは、ラウールが見ていた練習風景へとつながっていくだろう。窮地にあっても自分を保つのならば努力は欠かさないことだ――キャプテンの教えにしたがって、ベッカムはスペインで不遇に見舞われても自分のままであり続けようと努力した。今の自分を作り上げた弛みない練習という出来事を再現しながら。

あるいはヴィクトリアやファーガソンが、いつまで経っても幼稚であり続ける彼のために奔走し続けた事実は、ウィルキンソンとの僅かな交歓によって端的に表現されているだろう。自分から弱みを見せることで、相手から有意義な意見がもたらされることを待っている。それればかりか、相手の置かれたポジションを明確にすることで、同時に自分の置かれたポジションも確かにしていく。

こうした事実を鑑みれば、ベッカムは自分らしく生きていく術を備えている人間だと言えるだろう。急いで付け加えておく、ここでいう自分らしさというのは、一人で生きていくということを意味しているわけではない。自分らしさとは周囲の状況によって作り出されるということを、彼は十分に表現している。とりわけ、周りを取り囲んでいるものを自分の中に取り込みながら生きていく術を知っている。他人からの目線はいわずもがな、過去の自分も取り込みながら彼は生きているのだ。そしてそうした事実は、観客からの目線を十分に意識しつつ、練習に練習を重ねて編み出した端正なフォームへと表現されていく。

なおかつ、こうして積み重ねられた人生は、おそらく未来をも指し示しているだろう。監督になるにせよ、ハリウッドスターになるにせよ、彼が自分のスタイルを崩すことはないだろう。決して一人で歩いていくことなく、他人からの目線を常に意識しながら、それでいて自分らしく生きていくことだろう。四〇に近づき、その風貌は衰えていくだろうが、その生き様は一層たくましくなっていくだろう。ヴィクトリアの言葉を借りれば、フットボーラーは引退したところでまだ人生の半分を終えたばかりなのである。

〈了〉